

意見

大出 哲

「150～200億年の昔、宇宙は途方もない大爆発を起こし、高温の、高いエネルギーをもつ、原子よりも小さい粒子をあたり一面に撒き散らした。数秒の間に、最も簡単な元素（水素とヘリウム）が形成された。宇宙が膨張し、冷却するにつれて、重力の影響の下に銀河系が凝縮した。この銀河系の中には莫大な数の星（天体）が生じ、後になって超新星として爆発し、エネルギーを放出する。このエネルギーは簡単な原子の核を融合してより複雑な元素をつくるのに必要である。このようにして何十億年もの間に、現在、地球上にみられる化学元素が出現した」（レーニンジャー・ネルソン・コックス、『新化学』第2版、廣川書店、1999、上巻冒頭）。

現在の自然科学的理性（こう呼ばせてもらおう）の原因探求の成果である。神は見いだされない。あるいは見いだそうとしないのか。

これに対し、カトリック教会のドグマは答える。「すべてのモノどもの始めでもあり終わりでもある神は、〈創造されたモノども〉（*res creatae*）から、〈人間理性の自然本性的光〉（*naturale humanae rationis lumen*）によって確実に認識されうる。

『なぜなら、神の・見られえないものどもは、世界が造られたときから、〈造られたものどもを介して〉（*per ea quae facta sunt*）理解され見極められる（*intellecta conspiciuntur*）からである』（ロマ 1：20）」（Denzinger-Schönmetzer, *ENCHIRIDION SYMBOLORUM, DEFINITIONUM ET DECLARATIONUM* 3004）

これにかかわる筆者の小論“Die Finsternis im scholastischen Gottesbeweis”が、恩師 Josef Stallmach 教授の記念論文集 *Alte Fragen und neue Wege des Denkens*（1977, Bonn）に奇しくも掲載された。〈奇しくも〉と言ったのは、教授がマインツ大学カトリック神学部に所属するからである。大学を訪問したとき、助手の一人が言った。「お前はよい仕事をしたね。もしオレたちが書いたら……」と言って肩をすばめた。Stallmach 教授も Rudolf Haubst 教授も憐れみのまなざしで筆者を見つめながら、Denz. 3004 どおりの説明をしてくれた。つまり、今回のような提題がなされると、カトリック教会に所属する人たちは、きまって Denz. 3004 に従って護教論を

展開する。結論は聞かない前から読めるのである。Denz. 3004 命題は、カトリック教会に所属する人たちの間では真であり、それは、冒頭引用文が現在の自然科学者の間で真であるのと同様である。だれが何と言おうと、これは事実なのである。

両者の真の並立を説明する道はないものか。ある。提題者が使用した ratio の意味を吟味することである。Denz.-Schön. の Index nominum et rerum を引くと, Intellectus humanus = Ratio humana とある。この ratio は、『トマスのディオニュシウス「神名論」註解』で区別されている ratio と intellectus を含むものではないか。もし含むとすれば、両者の真の並立が説明できるはずである。なぜなら、ratio (自然科学的理性) だけで神に到達できなくても、intellectus と共に働くことによって神に到達できるからである (attingere という意味で)。「私たちは、信仰に属する事柄を考察するとき、自然理性によってそれを判断することはしない」〔註解414〕。「理性は intellectus と叡知に属する」〔註解708〕。しかも、intellectus は自然的力を所有する〔註解705〕。

Denz. 3004 には、res creatae とある。アヒルは、殻を破って出たとき最初に見た動くもの (例えば赤い風船) に、いつまでたってもついていく。これを〈刷り込み〉という。カトリック信仰に属する人は、〈モノはすべて創造されたものである〉という、いわば〈刷り込み〉を受け、これによってあの三段論法を正当化する。そこに安らぐ人たちの精神を乱すべきではない。その逆も、である。